

紋縮緬地熨斗文友禪染振袖

一領

所蔵者 友禪史会

指定年月日 重要文化財（昭和三十九年一月二十八日）

修理年度 平成十七年度・十八年度

修理施工者 株式会社染技連 文化財修理所

はじめに

かねてより京都国立博物館に寄託されている紋縮緬地熨斗文友禪染振袖（以下、本振袖と略称する）は、江戸時代の小袖として最も初期に重要文化財に指定された作品で、染織史上たいへん名高い作品である。しかしながら、指定された時点で、前身頃は一度切断されたものが再び接ぎあわされ、一部には欠損がある状態であり、本来は綿入りの小袖であつたろうものが、中綿も裏地も失われ、仮仕立ての姿になつていた。さらに、黒茶に染められた部分の生地は劣化が進行しており、取り扱ひの際に脱落する危険があるため、近年では展示を差し控えざるを得ない状況であつた。

早急な対応が望まれながら、本振袖の修理は、なかなか実行に移すことができなかった。それは、本振袖の所有者が、京都の染織業界の有志によつて大正七年に設立された友禪史会であり、昭和三十九年に指定を受けた時にはすでに、戦中・戦後の混乱もあつて会員の多くが連絡不能な状況にあり、それゆゑ修理費の捻出が極めて困難であつたためである。

ところが、このような窮状を、当館の当時の工芸室長・河上繁樹

氏の土曜講座で知つた浅野恭子さんが、平成十六年、本振袖修理費用の寄附を申し出てくださった。この寄附金を元に、住友財団からの助成を加え、平成十七年度から十八年度にかけて本格的な修理が行われ、本振袖は往時のあでやかさを取り戻すことができた。

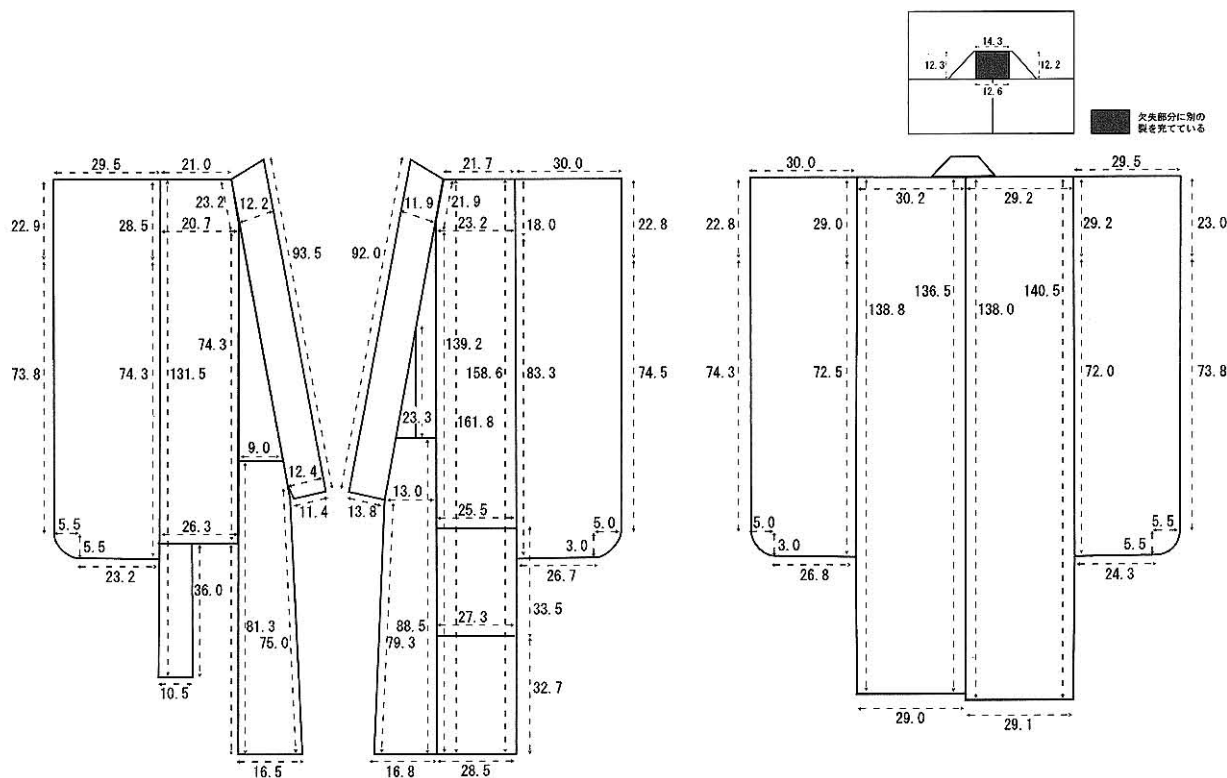
本稿では、この修理の概要と、修理によつて明らかになつた知見を報告する。さらに、これまで紹介されてこなかつた本振袖の箱書から、これまで本振袖とともに語られてきた野村正治郎とロックフエラー二世、そして友禪史会の物語を、改めて辿つてみたい。

修理の概要

一般にきものの修理は、①現状を精査して記録したのち、②解体、③欠損部などの補修、④全体の補強、⑤仕立てという手順で進められる。このたびの修理も大筋ではこの順序で進められたものの、本振袖には修理を始めるに際しふたつの大きな問題点があつた。

ひとつは、現状では失われている裾まわりの部分をどうするか、という点である。修理にあつては当然、この部分に生地が補われるわけだが、その補つた部分をまったくの無地とするのか、熨斗の図案を延長して付け加えるのか、また付け加えたとして、原本通り熨斗の内部に友禪染や刺繍を用いて文様を充填するのか、いくつかの選択肢が想定される。

いまひとつは、前身頃は一度切断され再び縫い合はされている本振袖は、縫い代の中に隠れていた部分があるわけだが、これを修理によつて元通りに展開した場合、身丈および絵羽あわせが現状とは違つてくる点である（参考図版1を参照）。



参考図版1 解体前の構成と寸法

さまざまな観点から検討した結果、前者に関しては、鑑賞の際に全体の印象を損なわず、かつ丁寧に見れば修理箇所が明確に分かることから、欠損部には熨斗の輪郭のみを延長することとした。そして、原本からのつながりが自然に見えるよう、延長するそれぞれの熨斗内の地色を染め、輪郭を縁取っている金糸の刺繍を加えることとした。

後者に関しては、一六一・八cmと最も丈が長く残されている上前身頃において、縫い込められている部分が約三cmであることから、まずは身丈を一六四・五cmと決定した。指定時の資料では、丈一五六・五cmとされているので、修理後は、仕立て前の状態で八cmほど長くなることになる。この結果、後身頃および下前身頃に補うべき生地が大きさが確定した。そして、縫い代を展開した際に起こる絵羽合わせの問題については、縫い込められていた部分が元通りつなぎ合わされた後でなければ検討できないため、仕立ての段階で再考することとした。上記のような事前課題を解決したのち、実際の修理は以下のように進められた。

- ① 作品の現状を、写真や図面などに丁寧に記録。
- ② 欠損部を違和感なく補うため、作品の現状寸法と図案をもとに、欠損部の下図を作成。
- ③ きものの縫い目をほどき解体。
- ④ 損傷部の補修。

・黒茶に染められた部分 破損が激しく生地そのものが劣化していたうえ、以前に適当でない修理が施されていたため、可能なかぎり以前の修理を除去し、新たに和紙で裏打ち

(参考図版2を参照)。

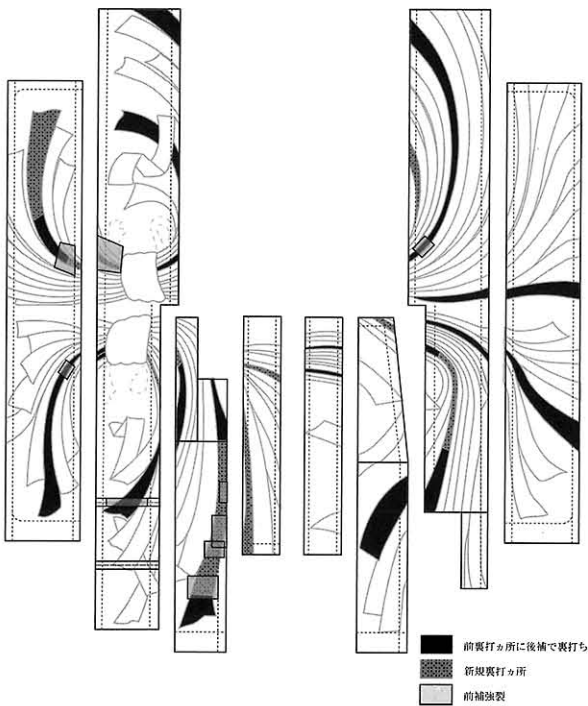
・金糸刺繍 金糸を駒繡していた留め糸が切れ、金糸がはずれていたため、金糸を留めなおす。なお、新たに補った箇所が識別が容易にできるよう、留め糸には原本よりもゆるい捻りの糸を使用。

・生地再接ぎ目 生地が一度切断され、縫い代に生地が縫いこまれて接がれていたため、縫いこまれていた部分を元通り伸ばして接ぐ。

⑤ 欠損部の作成と補修

・補修生地の作成 本振袖と同じ文様・織組織の紋縮緬地を作成。

・下図の確認 接ぎ目を元通りに復した生地に②で作成した下図をあわせ、欠損部の図案を確定。



参考図版2 裏打修理図(裏から見た状態)

・欠損部作成 図案どおりに絞り染めし、熨斗の中の色を友禅染で染め分ける。

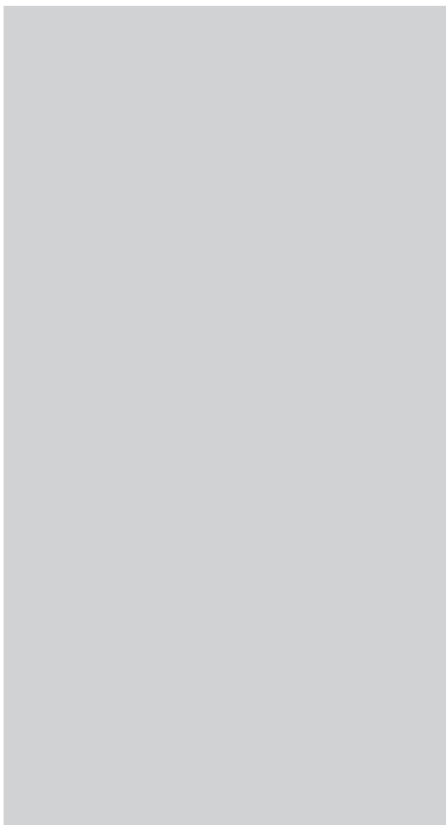
・欠損部補修 できあがった生地を原本につきなぎ、金糸刺繍を加える。

⑥ 生地全体の裏面に薄い裂をあてて繕い、補強する。

⑦ 裏地と中綿を新調し、絵羽を考慮しながら仕立て直す。

黒茶色に染められた部分は、染色過程における鉄媒染のために絹が粉末化しており、針を入れられる状況にはないと判断したため、部分的に和紙で裏打ちするという方法を採用した。絹の柔らかな質感の中に、和紙の貼付による硬化した部分が交ざることとなったが、心配したよりも、手取りはしなやかに仕上がったと考える。また、課題であった絵羽あわせであるが、生地の縫い込み部分を本来の姿に戻したことにより、かえって文様のつながりが自然になるという、喜ばしい結果となった。

さらに、縫い目はずして解体したところ、上前身頃の裾裏の生



挿図1 上前身頃 裾裏生地端 墨書

地端に「地上々本紅結ひのし惣もやうひなかたの通」「二十式」との墨書が発見された(挿図1)。この記述から、本振袖の地色は、高価な染料である紅花によって染められており、当時この意匠を「結び熨斗」と称していたことが確認できた。また作成にあたっては、意匠図である雛形が存在し、それを参照しながら加飾が加えられていったことが明らかになった。<sup>①</sup>

### 振袖をめぐる物語

―野村正治郎・ロックフェラー二世・友禪史会―

本振袖は、戦前に活躍した染織品の目利きであり、ディーラーにしてコレクター、そして染織史の研究者であった野村正治郎(一八七九―一九四三)が、大切にしていた品である。これまで、この振袖をめぐる物語は、野村自身が記した「外人とキモノ」および「キモノ博物館設立の急務」によって知られるところであった。そこに記された顛末は以下のとおりである。<sup>②</sup>

大正十年、来日したアメリカの大富豪、ジョン・ロックフェラー二世(一八七四―一九六〇)は、京都の野村の店を訪れた。店内で目にした数々の染織品のうち、本振袖に心を奪われた彼は購入を望んだが、野村は本振袖の日本染織史における重要性を説き、彼は購入をあきらめて離京した。ところが後日、野村のもとに本振袖代金の小切手を添えて彼から書面が届いた。そこには「其のキモノは一たん譲り受けたい、然しそれは餘りにも氣に入つたから、改め私から愛する京都へ寄贈する」と記されていたのである。彼の意気に感じた野村は、封入の小切手を返却し、本振袖を私有することを潔し

とせず、これを友禪史会に寄贈した。

この野村の記述を裏付ける資料については、これまであまり言及されていなかったのではないだろうか。一説には、野村が本振袖をロックフェラー二世に売却したことを知った染織業界関係者が慌てて買い戻し、友禪史会を設立したのだとも語られている。<sup>③</sup>所蔵者である友禪史会関係者の間では、大正七年の設立時に出版された『友千鳥』によって、本品をめぐる野村とロックフェラー二世の物語が認知されているのだが、この出版物は非売品であったため、周知されるには至っていないのだろう。<sup>④</sup>この『友千鳥』と、本振袖が納められていた箱の墨書には、ロックフェラー二世から野村へ宛てた書面がそのまま引用されている。以下に本振袖の内箱の蓋裏に貼り付けられた墨書を紹介しよう。<sup>⑤</sup>

〔朱文方印 判読未明〕

野村正治郎氏が秘蔵古衣裳中重なるもの、一たる熨斗模様振袖は友禪、刺繍、摺箔を應用したる元禄時代の遺作で意匠技巧は外に於て言ひ分のないものである。<sup>⑥</sup>丁度大正十年十月末米國の大富豪ロックフェラー氏の令息ジョン氏入洛觀光の砌に野村氏を訪ひ同品を一覧して賞讃惜かず時價九疋圓なりと聞き譲與を切望したか氏は友禪史會の關係京都友禪業者の貴重なる参考品である事を説いて應せぬので強いてとは言はずに其日は帰つた。さうすると十一月六日に日光に在る／＼口氏から九疋圓の為替に左の書翰を添へて贈つて来た

拜啓過日小生儀か貴下より申受度希望いたし候かの美麗且他に

比類なき／多様な色の着物に關し其後小生は強て御讓受を乞ふ時は京都に於ける友禪史會の／會員諸君が宮崎友禪及美術愛好家諸士將來の御研究並に御感得上永く□利の／障害を蒙らるゝと不鮮御當惑に可相成事を心附申候 小生か斯く恭察候に就ては／縦へ小生か真個の美觀と魅力に對する小生個人の興味を思ひ此古代美術品を一旦入手いたし度／候とは申せ於今彼の諸士か永久御研究の為敢てこれを京都市民諸君の為に友禪史會／に御寄附申上候を愉快とこそ存候 乃ち小生は之を以て一は小生が貴市市民諸君の仲を／伍して貳週日の滞留中市民諸君の與へられたる御款待に報ふる輕少なる感沙の表現とし他は／以て日本美術の真髓に對する小生貢獻の一端ともなすを得は寧ろ至幸とする處に御座候拜具

一九二一年十一月五日 日本日光にて ジョン

ヂー・ロツクフェラー

日本京都市新門前五 野村正治郎殿貴下

口氏は美術の眞の愛好家である さうして之を自己鑑賞の慾望の為に私有せんとするの美術界に對する／不情理を感じて九阡圓にて購求の手續を為し其儘友禪史會に寄贈されんとするのである／この大なる俠心に對して野村氏は直に御意正に拝承右の着物は直に友禪史會へ小生より／寄贈可致候依て金九阡圓は正に返上仕候不惡御思召被下度候との電報を口氏に致して／本會に寄贈された口氏の俠氣野村氏の俠氣相俟て本會は此大なる贈物を得た事を／感沙せねばならぬ

大正十年十一月

友禪史會代表者 廣岡伊兵衛

山陰外史橋正澄謹書〔白文方印「正澄之印」

〕（／は改行、〔 〕内は筆者注記を示す）

この墨書から、野村とロツクフェラー二世の間で交わされた遣り取りが、紛れもない事実であつたことが確認できる。野村、ロツクフェラー二世、そして友禪史會と、本振袖を愛する人々たちの善意と意気が、この作品を今日に伝える原動力となつたのである。

おわりに

二年にわたる修理を終え、本振袖は長い仮仕立ての状態を脱し、ようやく小袖としての本来の姿を取り戻した。修理後に仕立てあがつた状態での法量は以下の通りである。

丈一六二・〇 cm	衿五九・〇 cm
袖丈一〇〇・五 cm	袖幅二九・五 cm
後幅二九・五 cm	前幅二七・五 cm
衿幅一二・二 cm	衿幅一六・〇 cm
立裄八〇・四 cm	衿下がり二二・四 cm
	衿肩あき一〇・〇 cm
	肩幅二一・〇 cm
	合裄幅一四・〇 cm

野村正治郎とロツクフェラー二世の物語に、本修理の費用を寄附してくださつた浅野氏の物語が加わり、本振袖はこれからも美しい姿を保ち続けることだろう。

（山川 曉）

- 1 これまでも、製作時の合印や覚書を前身頃生地端に記した近世の小袖が報告されているが、その多くは衿付け周辺である。詳細については、以下の論文を参照。  
長崎巖「再考 茶屋染」〔『ミュージアム』第五七一号、平成十三年発行〕、二八〇～三一頁。
- 2 野村正治郎「外人とキモノ」〔『風俗研究』第一九八号〕、昭和十一年発行。
- 3 野村正次郎『キモノ博物館設立の急務』、昭和十一年発行（非売品）。丸山伸彦「近代の造形としての小袖屏風」〔『国立歴史民俗博物館資料図録2 野村コレクション 小袖屏風』国立歴史民俗博物館、平成十四年発行〕、二〇六頁、註4を参照。
- 4 友禅史会編『友千鳥』、大正十年、友禅史会事務所発行（非売品）。この冊子には、大正七年の友禅史会設立の経緯と、大正十年までの活動が記録されている。
- 5 『友千鳥』に掲載された写真から、このロックフェラー二世の書面は、英文であったことが判明する。また同じく『友千鳥』の記述により、すでに大正十年から、本振袖は当館へ寄託されていたことが分かる。
- 6 当時の見解では、本振袖は元禄時代の婚礼衣裳とのことであるが、現在の研究では、これを元禄時代まで遡らせることは難しく、十八世紀の半ばから後半の製作と考えるのが一般的である。背面全体に展開する大模様は江戸時代前期によく見られるものであり、当該期の流行には合わないが、婚礼衣裳は儀礼服であり、古風が踏襲されたと考えられるべきであろう。

末尾ではありますが、困難と思われた本修理を実現に導いてくださった浅野氏と住友財団のご援助に、改めて御礼申し上げます。

参考図版1および2は、株式会社染技連 文化財修理所の作成によるものです。